

大学生の恋愛傾向に関する研究¹⁾

川口奈菜（教育学研究科教職実践専攻）
篠原昂太（教育学研究科教職実践専攻）
前田拓也（教育学研究科教職実践専攻）
松林朱音（教育学研究科教職実践専攻）
山下志緒里（教育学研究科教職実践専攻）
谷口弘一（教育学部人間発達講座）

問題と目的

水野(2006)は、色彩理論(Lee, 1977)に基づく恋愛傾向測定尺度(松井ら, 1990)を再構成し、その尺度を用いて、恋愛傾向の男女差や恋人の有無による恋愛傾向の違いを検討した。色彩理論では、恋愛は以下の6つのタイプに分類される。(1)アガペ（お返しに自分を愛してくれることさえも求めない献身的な愛）、(2)プラグマ(相手が自分の目的を満たせないと分かると恋愛をやめてしまう実利的な愛)、(3)ルダス(交際相手に執着せず嫉妬や独占欲を示さない遊びの愛)、(4)マニア(自分が愛されているかどうか何度も確認したくなる狂气的な愛)、(5)エロス(相手の外見に強烈な反応を起こし、ロマンチックな考えや行動をとる耽美的な愛)、(6)ストルゲ(穏やかで友愛的な愛)の6つである。

水野(2006)の研究結果によると、男子はアガペやエロスが高いのに対し、女子はプラグマが高い。また、恋人がいる人はストルゲが低く、恋人がいない人はマニアとエロスが低く、片想いの人はアガペが高い。この他に、豊田(2006)の研究では、女子が男子よりもアガペが高いことが明らかになっている。

本研究では、これら先行研究の知見に基づき、長崎大学教育学部生を対象にして、性別や恋人の有無によって、恋愛傾向に違いが見られるかどうかを検討した。

¹⁾ 本論文は、教育学研究科教職実践専攻の必修科目「児童・生徒の理解と指導Ⅰ」(担当: 谷口弘一)において、受講生が3つの少人数グループに分かれ、グループごとに行った調査研究の結果をまとめたものである。

方法

調査参加者と手続き

長崎大学教育学部 4 年生 138 名（男子 30 名，女子 108 名，平均年齢 21.61 歳， $SD=.84$ ）が調査に参加した。2014 年 7 月 14 日に，講義時間の最後 15 分程度を利用して調査を実施した。実施に先立ち，データは厳重に管理されることが参加者に伝えられた。各自のペースで質問紙に回答してもらい，講義時間中に調査用紙を回収した。

質問紙調査の内容

質問紙には，フェイスシートに記載された回答者の年齢，性別，恋人の有無を質問する項目の他に以下の尺度が含まれていた。

恋愛心理尺度 水野（2006）が作成した 36 項目からなる恋愛心理尺度を用いた。本尺度は Lee（1977）の色彩理論をもとに作成されており，下位尺度としてアガペ，ルダス，マニア，プラグマ，エロス，ストルゲの 6 つがある。調査参加者は，自身の恋愛に関して，どのように考え行動しているかについて，「とてもあてはまる」（4 点），「どちらかといえばあてはまる」（3 点）「あまりあてはまらない」（2 点）「まったくあてはまらない」（1 点）の 4 件法で回答した。分析には各下位尺度の合計点を用いた。

結果

性別・恋人有無別の恋愛傾向得点

Table 1 に恋愛傾向得点の平均値と標準偏差を示す。性別，恋人の有無を被験者間要因，恋愛傾向を被験者内要因とした 3 要因分散分析を行った結果，性別と恋愛傾向の交互作用に有意傾向が認められた（ $F(5,670)=2.02, p=.74$ ）。単純主効果検定を行った結果、ストルゲにおいて性別の主効果が有意傾向となり（ $F(1,804)=2.77, p=.97$ ）、女子が男子よりも高い得点を示した。

Table 1 恋愛傾向得点の平均値と標準偏差

性別	恋人	ストルゲ	マニア	ルダス	アガペ	エロス	プラグマ
男性	あり	15.27 (1.95)	15.00 (3.60)	16.20 (2.37)	13.80 (2.23)	15.27 (3.45)	15.27 (3.57)
	なし	14.00 (3.14)	14.33 (4.21)	15.07 (2.18)	14.13 (3.76)	14.07 (4.28)	14.87 (4.86)
女性	あり	15.56 (3.47)	15.33 (3.98)	13.70 (3.93)	14.86 (3.68)	15.02 (4.14)	13.51 (4.90)
	なし	16.53 (3.92)	14.37 (4.25)	15.02 (4.08)	14.08 (4.27)	14.29 (4.65)	14.41 (5.07)

Note: $n=15$ (男性・あり), 15 (男性・なし), 57 (女性・あり), 51 (女性・なし)

考察

本研究では長崎大学教育学部4年生を対象にして、性別ならびに恋人の有無による恋愛傾向の違いを検討した。その結果、ストルゲでは、女子が男子よりも高いという男女差が確認された。その一方で、恋人の有無による恋愛傾向の違いは見られなかった。こうした結果は、水野（2006）や豊田（2006）とは異なるものであり、地域差や学校差を含めて、今後、さらに詳細な検討が必要であろう。今後の研究では、地域性などの詳細な検討を行うためにも、他大学の学生も含めた調査を行う必要がある。

引用文献

- Lee, J. A. (1977). A typology of styles of loving. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 3, 173-182.
- 松井 豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美（1990）. 青年の恋愛に関する測定尺度の構成 東京都立立川短期大学紀要, 23, 13-23.
- 水野邦夫（2006）. 恋愛心理尺度の作成と恋愛傾向の特徴に関する研究—Leeの理論をもとに— 聖泉論叢, 14, 35-52.
- 豊田弘司・岸田麻里（2006）. 教育用簡易版恋愛感情尺度の作成 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 15, 1-5.